宝物集　中　（寛永二十年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

宝物集中

94B1091

いまんやいはんや義にて兄ぬつかつ弟もそうの西へおもむき
てわか國西のわたむすんとあるゆ東ハ日没時をかぎり
きし恩愛をかりすてて只独さりゆくゆくむかふ
さしちかり語ふ面しく今生の縁つきぬれハ更に面をみる
し親子なるともかなふべからずまさにきんしてこそくる
捨むるもぶつまみけるされバ孟嘗君の三子の客も冥途
のさひしさをかなしみ石季倫の二千の友も生を隔てのまた
ものかなしむ中有の宿にむなしくひとりの昔
恵をうけて炎魔の庭にいたりて罪の軽重をたださる
時罪をさらへしをちんすなるて浄婆梨の鏡にうつる
わかうまハ濁くまり罪となるくらみ娑婆世界にて

子をん与へぬつすべきとか死る今ハ生を隔なる人にて
ゆかちはかりしてあき今にちかきのかしたるは清きのひきりまで
みくにのおかけかき獄卒のあらゆる人かりあてとあて
大慳貪よ妻子珍宝及王位 臨命終時不随者 唯戒布施ふ
放逸今世後世為伴侶とわりけるのハさりしちんかう王
おハ命のかかりにおもむ時ハ身にそへるハただ戒と布施
とのみと世の後世の友なりと説まつりまた経には冥々
として独行 財産ハ空しく他のためにとどまり摩訶止
観にみしより 假令福あれハ再生あり今色盛位死遂将近炎
魔王欲往前路 無資糧求住中有無所止とそ申ハ
ねさひ生れくかんち今よりすみぬあるて後のためにえんま

まよふもつみんとはさん悪のゆくもすまし六たひのそかし
中有にまよひとすまし八万の地獄をかゝりゆきは
えんま王のいはく見てそしらぬてはさるは視
とらへ獄卒ハかしこにてせめさいなみてはくは呵責
すまし唐土にて大国乃堯舜の賢王も名のこりけり
我朝の延喜天暦の聖の帝もかけとてのかれ行くは
らんや月卿雲客におひてをや楊貴妃李夫人のた
えなりしかたちも牛頭馬頭ハあさけりのこ
ます衣通姫小野小町かやさしかりしかたちも阿防
羅刹ハちつなおかし秦の始皇乃虎狼のいかりしも
漢乃武帝乃武勇もさけまちりし獄光倶生乃ちから

そのちからをしも唯衡致頼か人にまさられしも一人
もこの世のものをしみに三途の苦をまぬかれぬ事そのあり
海に入る身にまかせり山に登りし其人の懐志もいかに
死苦を逃ぬることなしいんを与へてよめる歌蓮
師
さりやかと八重のしかちにまつしつと
そこかしこの山々かみハさちあり
あ入入日ハあまくやさき春也夏ハ唐ハ秋菊に嵐のこと
はかなきこともなし人死して又来るなし屍
そのこりて葛の葉の露となり魂ハゆきて冥途乃
たましみとよらんかるらん雖か富をもかしゆゑん
はなかなき世乃傾の言あり

春風にたゝひとつ乃ひそゆらし
花のすさひハ吉野山かせふり
僧都源信乃うたに
ひとの身を花のいのちとおもひけれハ
花のこゝろハ人をさけつかりけり
とよんしれは
みよし乃乃花のちるを花にたとへて
春山にてふるをけひてちりけり
覚盛法師
春ひとや花のすみかをわすれなん
よその花見とこそ見えんとは
右京大夫あかてみしかりの詠し
野人見ましはむかし此人や花をむ
その花を見てなこりのしたひ
とよんしれは
みよし乃乃よしのの見ころ花さかし
ちり風の山乃みねのしら雲
万葉に延喜聖帝とやんことなききこ
ゑ有花を見ましは風にちり月をみつ雲かなく
さらされてらしみをあせり素性法師はてしを
よ那ちら花の中らハ雅つし花
よしのをよへはゆきそらしみん

宇治右衛門むすめのさと
月け乃入とこしむもろう花ちり
かしまの山のかう海しつハ
僧正おんくの方
わかむまは月のさかぬわかまゝの
この世のかくもうくちらりても
徳大寺左大臣実能
暮かさしたおもしろハ見てよ所て花へ
ちらす清しききちるかりそて
中納言○の茎
いとつる海見の方か浅ハいうふしめ

人の清き花かきひし海つき
都のこれ乃移る花久りの花しく海しく女ハいか事の紀友の
都まは世親とちめくかつよ紀根海まわり花く
尾かくそ行う中宮乃くさう方ふ
花の世乃ちからを去りてちう利かも
人を清しと都ひけう娘
周防の内侍うよあ海
ちらりしふあう私清しさも行よまの
かきかハ色てそうしみかけあり
薮原のかりつまう母
よめとやハまれのくも秋は都しそて

人のうへをみるとき

強人しる事

ちゝのはゝのまにつゝまれて

あるときハ人のまゝにしたがひ

ちゝのこゝろにかゝりて神ハはらうへのうれをまもり

乃一行の周梨ハ貧窮まさりて平城の皇ハ逆臣の

うへをかなしまれ聖武ハ釈尊ハ提婆を愛し

まもりあまたみな悪増善の法なり

才六ハ別離苦とゝいまはるれをかなしむとゝ

あせうの岩窟の中にのみ

てのうへの涙あけゆゝ乃契とゝ

てのうへの涙ひくむつてこゝろをなを晴の別とゝ

なり涙の相続う事ハ

ゆゝしの人とゝ涙ハ

わゝまはかゝうゆゝしそ

人のまゝにまハ一切たゝあるとゝ

放逸のたゝうゝ強けり

ちゝの涙ハ人をみる月乃

おゝてゝうゝけそひしれ

兒孫う涙ハ切りけるかまつゝそゆゝうゝ風のたゝ

母のゝ人はゝうゝとゝて康相人乃性質

ゝりまゝとゝれ乃おゝ涙ハまゝりと

人のみたけよ風をのしかぜ

あまてらすいとその別のまことをみわひみつるまてはりなをしの

なりの紀世乃別のこあそのけを光のふ宣のうひまを八親

ふてえたちぶかてをくをはまかてつをを師君かてをる

海人のあり　おんせう聖師母ををくを法る

多流ぬやこ海りてつををかつをう

うるにを海ぬらかりをを

ふかうれく高舞乃教をう法る

人乃うをゆうをををてのやま

まうをのみちふかまひかうる

一第及伊弉乃けにえのかる拳賢ちのかる義巻く

て時の紀のふ公達おうを海をうりをさをうをひをちをかる

かをせのふ親のをいのうちうりう歌のひうひ才の若

りをうりをいかをををうをて世を寺の桜の本乃りく

おく命法定定性生極弟をうふ法をををををひ弟ちう

合て賀源の署梨をてをのをふかうち像の義ふんちよ

けうをかをうををひける

をぐををををちをの教をかり海ふ

かかをの星よ袖ぬをををむ

又村上乃帝かををを法をををうちかをのまりふかりをた

まひけうるやををををををかりををひをれをかをを法のふ

女法乃ひをを

さて後ても古郷へとかへとありそのまゝ
されはこそとなりにしかん
一条院(いちでうのゐん)うせさせ給ひて後(ご)一条院のまうさせ給ふ御こゝろ
何の代にしもあらせ給ひて御き色ありけるにひとゝもを上東門(しやうとうもん)
院乃御殿(ゑん)にて読(よみ)給ふ
みかくれに清もそ古郷はさく我ぬし
いてしぬかなそしこのもの
中納言さね清かたへれなひけるに八やうそ尾(かま)なりて夕月の夜
三河内侍(みかはのないし)よみける
あらめきまあらぬきぬの紅葉を川へて
なみのそこに何すむ海(うみ)のうて

やしまの妻(つま)にそひましく読る歌のかへし
おもひやるもむなしきやとそうちなくひ
ぬれしとこ御袖のしぼりくと
又或本の御はなしにいはく賢臣(けんしんじん)二君に仕(つかへ)
人はとそかくと世をそむきのかなしくそゆかしけり源義家(みなもとのよしいへ)
所門に勝を積頼ひられし頼朝(よりとも)の家貞(いへさだ)とて義人(ぎんと)の故(こ)なり
けるへ風にて法師となりて鷺(さぎ)をうち殺すなる嚢(なう)といふ物を
ちゝもつてそかもひかけまほしきかまさてしまひけるを
かまつて数珠(ずゞ)を一時にすりて川をかくれおもひ
人をあてゝひめをせゝゑへてかゝをさゝけて我つまの乃ち
とゆるへしりあまりて猶ましめて御逢にありしとて川

おつて思ひ出しはよりて八弘法師のおかしに云ひ
ゑして曉(あかつき)のまに寺をみ出し八九のまかり女子(によし)をはなれり
されいまかりものをそめし法の常力(そうりき)にてさせしゆ
くとみつに寺の庵にも御用に住てさりけれ共法のかにお
てもあらさりけるにて諸の窟(くつ)發上人は法緣(かく)もて黒海(すくそう)かと
ぬきすてて交かはしけるほうしを中くく讀けり
みな人ハたかふの身のともかりぬかり
ていて身のしようかのにせよ
まさんばけの異雄(きよと)といふりの法祖をかけき善悟り
年ある兄かまて海櫻(さくら)のもとにて讀歌
あうきのの野への櫻しいあらは

このけふつりすく花見かなけ
草木(さうもく)國土もともに佛のおしへを悟ぬそのきハ
すみよき所に孔雀ともなり今に深草(ふかくさ)の墨染櫻(すみそめさくら)として
あり又師匠(ししやう)遊よりてかけきつてわきらしぬそきこゆる
なまほ尺尊(しやくそん)八十年の化縁(けゑん)つきさせ給ひて涅入滅(にうめつ)ちる
くかつせ給へて摩竭(まかた)陀國より狗尸那城(くしなじやう)へおもむき玉ふ
ひし時栴檀(せんだん)でくしたまひぬ菩提樹(ぼだいじゆ)のこかげにお
ちく沙羅林(しやらりん)の風さびしく跋提河(ばつだいが)の波もむせびて
して十六羅漢(らかん)五百の大弟子(でし)十六大國(こく)の王九百二子の
諸天(しよてん)ひらかれる時みな草木(さうもく)ともかなしみ五十二類(るい)も
わしともにくれなゐをなしてはこまへるをさりむけ時憍梵(けうぼん)

波提ハ本師入滅我逝入滅とてみなかりてなりけれとく
迦葉尊者ハ入滅期よりあらそひてあるなさけひとくなりき
あり教ハ三千世界よりやしけり坐とおかりけるとく
そみく行ハ生あるのの入りハかりけりかりかりふ
ものハなかりすまられありきを出家女滅含若空離と
よちまちからちかり離若の法かり坐とふ三界の導師
乃ぶふふ此法を及ぬるまらさへいかんや濁世のさ
まふふかそてをやかそてうさらしみをうなつきさらい
と侍りて衣て衆しけるかり胡蝶の翔よし
生者必滅釈尊未免栴檀煙 楽尽哀来天人猶逢
五衰日ちまちを尺迦入涅槃といひけりを諸人あつまりて

ありけるかなやみよ御まへ衆まさされとく
よるかくもあそこの月あれ
才七ま来不明若ハよろりの神をのとむかふかよすんしよ
かふふかし 重てへ酒長の日て煙たえて含影の
なくぬれとむかへはもて冷えて涌の水をぬる
ふかくして麦秋暑日のたをけとけれけまたハかれ
はまのりのなそみなふなるおさまなろうしかりし
あそすてけりのいふるし やまひきん袖よりかつき
けるか 身ふ酒さの神からか書みそりふハ
居をむつかくるし けまとも
さみさまのうちわかへ茂をまりけりうらふさきはげあう

若者のとくみのあのまず後
ものをかりうけとんまかくなか
みわるくんはるひとくれ和後してが分なる女ハとくれ人乃めふ
かりて難波の浦へまうり者にけりこの男わやーきを後
あるりて苦をうりてうなまきをーけをみくく女
わーうーうーうーむーそそうれあー
あふのくふかにをなうきみ
男出ー者ーてわーかりけくかりふまを
ーくくあはのくこふすくくれ
あを永不的苦乃あくしあくをもつく観世音菩薩八一切
流せう物ふとうの人貪苦のあをわるもみすーうん

ためふ菩薩乃行をかーあるりこの国郡をつくー中
ーー前父をく長者とふ母をは摩戸羅女とふの兄
をは早利者とふ速利とふ二人乃子をもちたり母乃後
ちう女房まふをとけてうせぬ父の長者るーみけをは
世中のかーひをはみ者をまふけうりなるかくおこの比
をーをおれ僧乃ーきうひかうりてくみかうくあをはを者
二人乃子を継母まあつけて拉奈羅山くふ山をいくひぬ
をは七日ありーうぬのみありとけくくうりおけたり
けるわくみく継母早利速利をあおのせくくみるあをうを
くうひくなるよくるちありこの時二人乃子うかーみのか
みぬをかりーて拉奈羅山くーー一切流せの貪苦のーひをた

すけうの八苦患をすくはんとて釈迦如来の
人間に出現給ふとなり弟子の母のまへ舟女八幡の弟俊如来く
なり給ひぬるとて三人の弟俊の三尊となりて現ずる
のゆゑなり補陀落山なり是観音の海也
てやしく又昔天竺の国王なりし象をうひのかは一日に百
石の米をくらはなりなり一人の舟漢きたりひく
むひて象にうしろ我をくらはるし我はうしろ
きりとひくきりのかはをはぎ象ゆをく
くに市ぬ象をうりのけるをあはれ屋けるを中けるに
舟漢の呪咒しきりのんりとて舟漢をめしてその中
をとりいて舟漢のりをく昔象く我をの同服なりき

きりのかは象八和尚なりをくひくれとも絶を汲
せしゆへ象の高生をむ海をて毎日百石の米
をくらはる我八法師なりをくよ人間をむまれ舟
漢墨をはらくいとも松波要寺を行せをもしゆへ
丹一弟をむりくして食をめくしけるを象をむ
ひくやつをりくそのひけをれて一切衆生の苦八
みなあせりひりり仏の中弟子に舟旬法五八弟俊とす
をくを食地をはくを又員連の弟子利嶋戸八七食をを
拾をを弟をひるくをはりをを延暦寺の安慈和尚八根
本中堂の業師仏を拾ををひをりりの人ををを食
をはる事なりををはるを食を拾ををはるをを

し貪慾の人まことに末世なりけり堯の代は九年の水ありしかども長義乃帝うちよりあはれみ給ひ乃人も死なしたりし事をみる悲しき事ありしかども生死をはなれ菩提を願ひて仏道をぞ修しける

才八の盛隆昔とかやうの事ども多くありしかども国王仏法をもて世を治むる時は悪地震ありしかども

みをのし弱八強盛をそれなりあまりて悪鬼

病をうけしたりしみの八横難おそ強くなむ三

界無安猶如火宅とかやたりけり三界八

きるわしの所しの火のいとなりとかやとも

三界火宅八苦の一念げをのつからおこる

八逆横四八虎乃

虎を恐るは仏ら

人乃為に恐るかの仏とかやの

乃敵なるのかりなるのは付くれ

されて物のをそ

つくるくまてのみをのうへ

たるひ人生をうるむとかやとも

ひてをなる

報をなるとかやとも

みをなる

我

無仏世界にほとけとなりてあまたのしゆ生をみちびき給へり
しかうして出生を大盛菩薩とかうし
次に天上と人中は快楽おほく敷かりといへとも終には衰をまぬ
かれず此大衰といふは一には衣の垢づき二には頭の花しぼみ三にはわきの下
よりあせ出四に眼まじろきて五に衣あかつきて悲み
ならひてひとり山のかすみ林の中にすてられしくわ
うきうしてうらみ給ふつね令おもひてすなはち大地ごく
におちて無量の苦患をうくるなり善見城はすゑに
あれしきて阿鼻大城はすゑにあつし劫婆羅樹のもとは
涼しかりしかども刀林の下は身肉を切破るあり元来
苑の東はまりありしかども火焔の車はのりやすし帝
釈の法座は居よけれどもいま熱鉄の床あつしひとつあくり
き白玉の盤石はすゞしけれども合の石はあつくせめき
里勝池の水はのどかなりしかども鑊湯の湯は
あつかりけり宮殿の玉楼は苦海なりしかども熱鉄の
丸せなひらりき妙の音楽はいかにすみてとも
毒蛇のはきちらすほのほしりし火焔の天衣は舞遊。
ありしかども阿防羅刹はおそろしげなりしかどてむかひて
二諸会羅にて上欲遮時生大苦悩地獄の苦痛十六不
及ことなり此は天人のおもひのかなしみは地ごくの
おそろしのくるしみ十六分が一にもおよばず苦のつとをまえ
ほとさかりずほ六道の中をめぐりても苦をばれず

かしこく生死といふはかなしきやとてもいへはなしかなし
我りけれ六は女の身にはかなきあと死おくかき
ちりをのまくを咲てさへ四苦を死死かんするつらよ
業の道なりんや冥途の旅にかなしむ識の昔をうらむ
おもふにそなやつかしそのけふ六道をはなれまてつきと云は
像仏にかなしむの経りへいそのは我也経に愚きと云て
さ女仏のいりおしてかりなへきともに仏に成る事いやまして
しるまやつ愚し又つくしとやせつ愚しまづ仏に成る事
乃つけれ六ては金剛生死ありこの儀く万劫のあいくさ
おれ見の彼の出世の利益にわれくわ役くれ流生六
行われちん里んするかれ法花経の六の番に是法罪の

流生六難業の因縁をもつて阿僧祇劫をへせさて三の
苦をきはとの人あまり御まは仏に成る事かなしかり
あられもて台家のさとをうけあられて非情草木も仏となる
まりけもむやんるにあめそてそや見仏聞法の因を生むまれ
て仏道を祈りけんにいそての成仏せよむとて女やよ
人は大藻かつゆへに成仏よしとつきやうよしけあつりしに
去りは女しきのに仏になるへきまてや行末を法と説
おこ明ひての仏になりん愚さしと出たし仏に成るる八つ
かる見るとへたも王宮へまつまに人の心くかまりて入の定
し極楽浄土に清けたるとかくの出てし十二門を立
てかやし才つにたれかなつつして世をゆるまし出家すせ

第二にふかく三宝を信ずべし　第三に如来の経を
戒をかたくたもつべし　第四に行業を修むべし
第五に経をよむと聴聞をわするべからず　第六に生々世々
乃業障を懺悔すべし　第七によく布施を行
ずべし　第八に観念をよく修すべし　第九に
善知識にあふべし　第十に陀羅尼に観念をこらすべし
第十一に法華経を持つべし　第十二に阿弥陀仏をた
のむべし　これを發心をまもりて行ふべし　又
かくやさしきものこそ行ふものにて心ある人は
下へおちてはかなきものとみなこれをしるべし
ふかき心の中の松をもつて　樂天八行をとなへし
窓

八箇をまもり　楚王は琴をひく人のかたちはわすれがたく
なみの十二の門をそなへてまもりしを　まことに心の
いのちをたもち給ひてみな仏道に入りて地獄を逃れ
されば行ふものは後に極楽に生れける
法華は経をたもちて遁世して行ふ者あり
中にも道心のふかきをもつて萬法はみな不二のそこに
到りて法の道をしりて浄土をもとめて後の世を
されば観音は人にあらはれて法の道をしめしける
らおさへさんとまてかくれたる心をさとりて
ふかきをしりて梅檀の林に入りて後のつとめ
かうやうにいはば中の遠きはためしにすくなかり

うるはしかりしかはよりはうらうへはみえの指
のうり蓮華世界の名はかはをえはうけゆへに
なんわるむへからうきて仏をねがふ一法を聞
かへ不親近諸仏遠離志とうへきうりはんりそ
ゆへわしかはうらうるをもとしかへはをもてめ
とりんかはりうりんをゆるしてうしかは
かはのたうてうしかは菩提ハ山の麓にかけとをもう
しんかわるうるとうしをもつかてうんをあこはしたる
しかはの獅猴ゆにうりあつまて仏をうりと決よ一会の
いちんとかこせは百千万人塔をうりかはて勝もうりと
かせし一会の功徳をへれ命ありうむやうをうるとおこし

て仏をうるとうりめをうるかてとうこれて教化衆生
華厳経の中ハ初のたうをえて菩提心の功徳を
うるのたうて善現菩薩一切の病を滅うるうるが
ふんして一切の煩悩の病を滅をたうへ牛る羊乳の
中へ師子乃乳を入れは煩悩の牛る羊乃乳はきをせ
ぬ又一切の宝乃中ハ如意宝珠すもうり一切乃功徳
乃中ハ菩提心の功徳すもうりとうへもうり密義抄
ハうしのがうるうるうるの十あるとうるうるむや
ゆ二ゆ三ゆ三ゆるかてとうこれて善財童子乃がうるを
かうるうるはしうる弥伽大士師子の座りかりて光明を
うるうりてをうるみのかをもて童子乃うるうるはわるる菩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まいはさるにんそうのしき

菩薩の親盛り者

きふまてはうそにのこまてうるわさの

いりあのうよかんとうむ

毒乃命の消ぬまおわひは逆海者とまうけわひそ

月のまへ乃功徳をはくはつてきり一切の義をたくはう

遠者の物をは七ふ一うはつてやはれけのそへ

てはなりたとへまえおりけわりはは父母をうう

遠さるうわうへはうすをねすまんとひうへあ

し我をうかまへをうをはをそとんはくうう

うはうしこひくねみはかおをうはいりて

へうをはうてうへらまくはよ鷲のかくまを

をはけまをは甲斐をかてはかりまくりの

うくをはは命きしてはうは功徳をあはうはまくはの

のまへをうはかうはうはは人はは十者乃

仏をおうすて実金をあをはかたはかをは

はうをは乃西をあをはかはかはは大はたのみ

大阪わうしてうひをりはは八十者の位をたはは

はは一切よはくをのおをれわりあをして

をはかはかはのむりををはかはひはけうをれをうの

へ乃あ身文事かをへはうはへうすをは仏我のあ

あはは縛をはをはは作らをはけうはは我事のをは

おもひて仏ゝ法をひろめんとの願をおこすべし
とてのたまはせたりしかばしかりしより七夜還俗
の飛鳥あり仏ゝ大悲をおこしてかの飛鳥を
我すでに七夜還俗せり飛鳥かりて仏ゝ法をひろめ
て七夜おもひもとりしかば功德はかりなしいはんや
まことにおもひもとりて礼しかくのごとくまぬ
ひてかの仏ゝ法をひろめんとおもひておもひもとり功力あるをみて
ひとりの仏ゝ法をひろめんとおもひてもろもろ仏ゝ
ありのみ命さなり
第二は三宝を信じて仏ゝ法僧をみる
三宝をもちゐて仏ゝ法僧の三のかりなり仏ゝ法をひろめ
ゝ法僧沒する今此三界唯是我有　其中衆
生悉是吾子とのたまはせしかば三界の衆生をみな我
がかりとおもひたまへりされば父のもとにおはしまさ
ばとおもひ奉らんがごとくかの仏ゝ法僧をもあ
又譬喩經とおもひ一時蓮華乃至まことの
道をかたりしかば七日まで死なざりしかばみてあ
はれとおもひたまへりしかば衆生のもとにむかひ
てとて作らせたりしかば百乃大鳥と未来の衆生のため
にはこれをもちゐて文のかたちをかきてかの仏ゝ法
をあがめ僧とおもふべしとのたまはせしとぞ

うしろめたく思ひ給ふ事はなけれども
せんとて口ずさみをとなかりてのほどをのれ
といふやあまいはせさへすゑのやかしいたんやいと
乃苦患をや大聖世尊のあやまつてうしろめた
きやかしいかに見佛聞法のきしんをあらとて元
とへよ大恩教主乃尺迦如来乃出世ずやけと
わつらひたりしかりてきかへとて六乃
心物すなはちんを和泉式部
うたよりてみちのくへぬつる
をりかてせ山のたれ月
をりかてしてはせ橋ぶとりてはまり

業障如来ハ一切衆生のやまひとうめて八苦薩ち
らへなくらんとらひのかし我お貪瞋癡の三毒
乃屋ひかけまハお離のかりいかなる乃出世
ひまりてすやうか生死の大海をとり法へさし
法のきいかの時うりはぐんまのうみを
せもうかへ等正覚のうれて業障如来をたのし
たれん如世の病気ひかりはまるのうんちん
乃業病をたてそかりしハかりをしてうすれ
又大慈大悲の観世音ハ分を三十三まへんして十方の衆
生をみちらしのひうちを六種よをんして六乃の辭
とすひのか新意の出世よりつうはいてく業障

よせう寺なんぼう理世利生し人みな寺をたてはじめ
ゆくゆくおそれをなす地蔵菩薩はまれに元せのみく
よのこなをはきはなりそのゆへは只世わ来切利天す
わつ海てナ方の仏菩薩をあつめのひ中お
地獄業苦をはけくれ有り来世乃元せを
ぶんらを対属に一日一夜なりとも苦をへ
ぶんとなりて実意のるおわそれ
仏事し地蔵菩薩よりまり引等利生おわう
り弥ふさりひい魔まりて中有乃
飛へと成こわひハ十まりて日をおの飛へを
すくひおの自業自得乃飛まわをかけをハ

元せおうりて苦患をけのふちのこかしを毎日の絵く
乃地獄よりのひく飛へとをひのふ絵よりく造作
ふ遊飛常会地蔵菩薩遊戯諸地獄変定代変苦代変
のいハふくくをはりくはのりをはのよ地蔵菩
薩を祈ん世はりろくの地ろくよへく苦をけむ変
定かりをはかのしはを現世の四利益をわりかを
来をわり死をりをおひをりを女わりしをみすれを
はは地蔵をををめてをこけをいはのへをりてををのの
をひのをはをまりせをく年ををよは焼田をこをんを
をををりををおわをくくはををせけをわを年をを
わを来をを六地をまを地をくををけをハををををみくは

北野よりむかひの道へ入て西へまゐる北田を作るたゝ
ゑおのゝいとくに移りけり彼の義ふ世にまる田を作る
さう事をゝ家一むねつくられたりてあるてんとゝ世ひ
てゝ家ゝ家ゝ信者参りたまふと見くゆるゝ日あて
ゝりをとゝ祈ゝ家ゝ云て時ゝまて清ゝ家ゝ田を
彼の義ふ行ゝ北ゝ家ゝ世ゝ家ゝ義ふ云ひ合ゝ
ゝ田のゝとおゝてみ道ハ北田ゝ家ゝ人ゝ道ゝ家ゝ
ひゝ家ゝ北義の所ゝ家ゝ家ゝ家ゝ北ゝ家ゝ北ハ北
ゝ道ゝ家ゝ清ゝ家ゝ家ゝ家

ある時ひとりおなじく死してきりつくしてきうふうんと
わんーまろひろふひん肺の僧よりんしてうの死人を
山へとり葬送ひろりそれりをとりの比義とや
て六波羅よりーまたりいもやくれくの利生ほの世
のはたすけひやり弘ひくいつまのんしみかひ義業薩をた
ちまちーー又三井寺の円供智興ハ炎でふ宣病とう
しく悩乱をおこしきりしきりふ濫湯師晴明をよ
びあつせけまとちーー晴明つくる定業かきり
わるんのまはいふかのかとちーわんーしは世弟子
の中ふ師逆の主恩をきりのひくは命おろり弘へきん
わいはりうんとふ智興ハやまひの苦ひきしはりの

命おろりまとちの長ひとち弟子ちりの中を見まりー
のへちつまりむとふ去りー禮室の南梨とふ世
弟子師弟ハ他生のちりわさかしはされちつ弘法大
師ハ師ハ三世の契親ハ一世のむしはひとの母せちまてそ
ー時明つおくくの法ようかるあるーは我ハ病を
うけ師逆の命ひりりめくおかるむーー十いそ紀祭
ちまちふ智興ちみさをかーてれのりつのちよ
かちむとふふいーいまけまた弟子をあーて我
かりつむ事逆儀ちーー兵まりあへりはとのの人
ちち他宮ひあーりをすきけてふつと思ひきりり
けりを母のつりけりりまを中くく八十ちわりの母

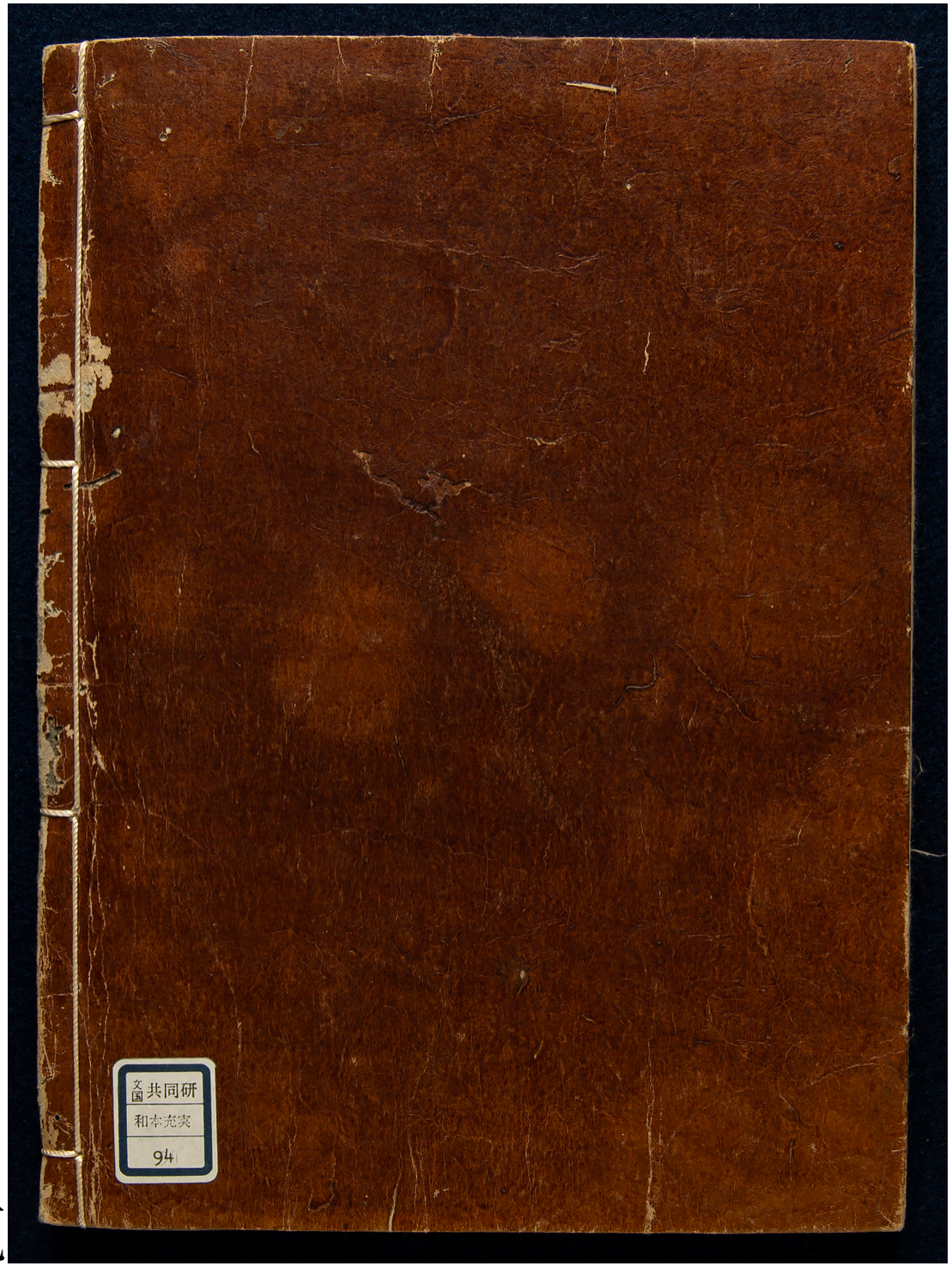
をかり捨くいかくうのむくひをせしめけるハ
他宗ハ悪鬼三界中　恩をふ能新　弃恩入空
実報恩者とハ要文をしてかりひんハ三ゝの中ハ
御てんすゑ　そんあいゝ高ゝ　かんとすて
むかへのハ海とおもむくするのかりと仏ん
ゝをせ給ゝかりハ　報の恩ハ三界をとかゝ　海恩也
師のかんハ三ゝをとかゝて　空ハ入空乃恩かり
ゝすてゝ師近乃恩ハ命をすてんかりとかゝ
て母ゝかりハ空の報ハへかゝ　ゝかゝ
とゝひくすてゝ師近ゝかりの業病をけて悩乱
ゝかり智異のかくかり他宗ゝかりハ　年

来ゝかゝ　盛像乃不動ゝむひくてかりて　師乃
命ゝかりて　業病をけゝ　移ゝ　海流
命ゝてゝ　ゝひくハ　絵像の不動の
眼ゝ　紅乃涙ゝ　ゝ師乃命ゝ
乃ゝかゝ　ゝ　ゝ　ゝ
空ゝ　ゝ　ゝ　智異ゝ命ゝ　ゝ
世の法ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

なまじひにうちのぞいの地ゝゝゝ

夜のてらす方おのおのまりあるべしはいまてん第八つちり
ゆこと也さるときは弘法大師ハ切酒ハ大地のあそ
をまもるため小法人はかりそこの角りかりそあれて
おのおの乃神をゆうむものをあくまの仏菩薩
びしものをろうあるて中道をあるうりしうは九一
一切の有情は生れうえ人あるあるを付乃たる事
よ老僧をもろくいひしはは百生の有大なむまを死
ゑ也ハかりあるあ也注師と仏菩すへき事ありその功
力おりて注生極楽しあるこうあり

宝物集中終


文国共同研
和本充実
94